
終わらない

遠星 啓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わらない

【Nコード】

N6153Y

【作者名】

遠星 啓

【あらすじ】

ある日パーティーの招待を受けて出かけた淋しい主人公は気が付けば怪しい洋館に着いてしまう。一体これはなんなのだろう？と言う悪夢ならではの不条理な話。

招待（前書き）

心を病んでいたわけでもないけれど昔みた悪夢。夢見がちな子供だったんだよ、たぶん。最後は微グロ。夢なので、トンデモ展開有り。

招待

ある日小さな赤い封筒で招待状が届いた。

招待状なんて言っても、よく行くインテリアの店の

小さなレストランを貸し切ってする7周年記念プチパーティー。

なんで7周年だよ10年までまてよなんて思いながら日付を確認する。

ああ、やっぱりその日にも予定は入っていなかった。

私は車をもっていない。

それにせっかくのパーティーなのだ。

アルコールも少し楽しみたいところである。

だから会場のレストランへはタクシーで行こう。…少し贅沢かな。

いつもより少しよそ行きの服を着て（あまり気合が入ってるのも恥ずかしい気がするんだ）

夕方からのパーティーに、小心者の私でも余裕があると安心できる程度の時間をもってタクシーを呼んだ

同伴者OKのパーティーに一人で行く私は、やっぱり浮いてしまうかな？

なんて不安で少し寝不足です。いやいや、あの人のお店なのだから大丈夫。

せっかく招待状をくれたのだ。…優しく丁寧な文章で。行かなかったら嫌な気持ちにさせるかもしれない。

タクシーに乗り込み、道中ですらうだうだと私は考えていたが、益体もない思考はいつしか睡魔に溶けていた

ボタンっとタクシーのドアが閉まる音で我に帰る。「開く」音でもタクシーの運転手の声でもなく

全てが済んでから気がつくと言うのが情けないが私らしい。

多分寝ぼけたまま運転手に言われるがままに金を出し、会計を済ませたんだろう。

まだいくらかぼんやりと走り去っていくタクシーのエンジン音を遠くに聴きながら、周囲を確認する。

さて、目的地の小さなレストランに着いたはず。

……あれ？目的地についたから降ろされたんだよね？ここはどこだ？目の前にあるのは小さいが雰囲気の良いレストランではなく、まるでナニカの舞台装置のような山の中の洋館だった。

洋館（前書き）

主人公が初めてしゃべった。そしてビビリ。
主人公はインテリアのお店の店主さんがちょっと気になります。

洋館

- 一 いかにも怪しい洋館などに、入りたくない。
- 二 もう日は落ちて空は橙から群青に侵食されてきている。
- 三 携帯電話は電波が通じない。

踏んだり蹴ったりというか、なんというかもう。

「くそ！死んでしまえ！！」

何ものかに対して呪詛を吐く。むしろ叫びたい。ああ、でもそれはさらに情けない。

最低限の見栄で、なんとか叫ぶのは我慢する。

そもそもこんなところに運んでくれといった覚えはない。タクシー会社め滅んでしまえ！

現状を打開する見込みのない悪態を、ひたすら胸中で捏ね回していると、さらに残念なことに完全に日が落ちていた。

ここは山の中腹にあるのだろう。遠くに街の明かりが見える。タクシーで登ってきた道をたどれば帰ることはできる。

うん、たぶん：10キロ位？だろうか。

知らない土地のしかも夜の山を：ライトもなしでな！

それを拒否するのならある意味ありがちなことに、廃墟で一夜を明かさなければならぬ。

嫌だ嫌だと思いつつホラー映画のセットのような洋館を振り返る。

なんと、意外なことに電気がついていていた。よかった、廃墟じゃないじゃないか！電気があるなら固定電話もきっとあるだろう。

玄関であろういかにも「洋館」というノッカー突きの扉の前に立つ。私は生粋の日本人だ。ノッカーなんて使ったことはない。

というか、今の時代インターホン、もしくはカメラ付きが標準だろう。

どうしたらいいか玄関先でまごまごしてしまおう。わからないだけでカメラがあるのなら立派な不審者に見えるだろう。

周囲からは風が揺らす木々の音しか聞こえない。待っていても状況は好転しなさそうだ。

覚悟を決めて、私は力強くノッカーを叩きつけた。

ガウウンっつ

大きくノックの音は響きわたった。電気は付いているから家人は居るはずなのだ。……だが反応はない。

……もうちょっと待とう。

さらに5分ほど待っても反応はなく、私はおそろおそろ玄関の扉を押し開けてみた。

先客

重々しい外見とは裏腹にキィイー…と軽い音をたてて扉は動く。私は15cmほど開いた隙間からこっそりと屋内を覗き込んだ。結果…玄關ホールにいた10数人の男女全てに凝視されていた。……こっそり覗いた分余計に恥ずかしい。逃げだしたい。

屋内は洋灯がキラキラと輝きヨーロッパの高級なホテルのような様相だった。

広いホールにテーブルセット、立派なソファが置かれている。そしてそこに、青年、中年、女性、男性、幼い子供連れまでがおり、しかも服装の統一感もなくなんの集まりかさっぱりわからない。

「君も招待客かね」

実は屋内を観察する間、私は入ることも、かと言って実際逃げることも出来ずに扉に張り付いていた。

先客らしい中年の男から声をかけられやっと扉から離れ、屋内に入る。

ゆっくりと扉は閉まった。開けた時の軽い音とは違い、バタン…と重々しい音を響かせて。

「いえ、その…」

私が羞恥と人見知り故にしどろもどろとなっていると、威圧的に男は続けた。

「違うのかね？では君は一体何をしにここに来たんだ！」

50台位のなにか偉そうな男だ。身なりも良く、だいぶ裕福そうに見えるし、社会的な地位もあるのだろう。その割には短気な…

脳内の住人である私は、この親父はどの程度の人間か？などと評価し、いっそ扱き下ろしたりもしているのだが

表層での私は、男に気圧されまともに返答も出来ない。

それでも、なんとかモゴモゴと答えようとする。

「あの、その…私はここに招待されたのではなくて、」

「ここの住人なのかね!？」

さらにいきり立つ男に、人の話を折るな、最後まで聞け。生き急ぐなら、勝手にさっさとくたばってしまえ!

罵詈雑言を心の中で投げ付けながら、うつむき私は事情を吐き出した。

「…どうやら、私は迷子のようなのです」

この年になって迷子も何もないだろうと、罵られるか、呆れられるかかすと思ったのだが、

場全てがしんっ…と静まり返った。

先客（後書き）

前段なんでもっと省略したほうがいいのだろうか。

主人公は内向的だけれど攻撃性は人一倍高いです。臆病なせいです。英雄的思考ではなく過剰な自己防衛。オチの行動の理由だと思っていただければ。

事情（前書き）

鉄道オタクさんごめんなさい。

ここでは鉄道好きのジオラマ好きの人を連想しています。

珍しい鉄道のミニチュアとかのオークション的なイメージです。

事情

「私たちも…そうなの」

親娘連れの母親らしい、優しげな雰囲気的女性が酷く硬い声でそう言った。

「は？」

私の口から漏れたのは一音だけ。
短気なオヤジはなぜか呆然としていた。

さて、この洋館に集まったのは、みんな方向音痴の阿呆なのか？まあ、その場合勿論私も含まれる。

結論は「否」。一番近いのは…神隠し。

この結論に辿り着く彼ら「先客」達の事情を説明してくれたのは、眼鏡をかけたヒョロとした青年だった。

正直ぱっとしない青年だが、この異常事態に興奮しているようで、滔々と語ってくれた。

彼曰く、私達は「招待客」らしい。

最初にここに着いたのは、鉄道オタクのサラリーマン。自己紹介して名前も聞いたんだが覚えられない。

うん、もう「鉄オタ」でいいだろう。

鉄オタは「即売会案内優先券付」を貰って、会場まで電車と徒歩で行く予定だったらしい。

そして電車で揺られてうつらうつらしていたら、気がついたらこのソファに座っていた。

訳が分からないし、携帯電話も通じない。

外には出られるが明らかに街は遠いようだと、現状確認していたら、気が付けば室内に人が増えていたとのこと。そして、同じように気が付けば…を繰り返し16人。

なんだそれは。気持ち悪すぎる。

鉄オタは「即売会案内優先券付」

短気オヤジは「大物政治家の祝賀会」

親子連れは「デパートの立食食べ放題」

上品な御婦人は「着物展覧会」

若い夫婦は「新作映画試写会のペアチケット」

眼鏡青年はクラスメイト（女子）の「誕生会」

他にも：

様々な文面で様々な人間が《誘き寄せられる》

以前読んだ民話でそんな話があった。

背筋にゾワリと悪寒が這う。

口には出さなかった。言葉にするのが恐ろしかった。

少し得意げに、眼鏡青年は語る。

「つまり年齢や性別、社会的地位は全く関係なく、共通点は「招待」を受けて、

「《ココ》来るはずでなかった洋館」にたどり着いていること。

そして、意識を失ってここに着くまでの経過を「覚えていない」ことによって訳なんです」

…違和感があった。私は、違う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6153y/>

終わらない

2011年11月19日18時08分発行